庭

俺は確かに葬られてしまうのだ
あのじめじめした茶色い泥の中へ
なめくじやミミズに等に囲まれて

しかし今、ここの噴水はひっそりとした光を保ち
この石造の美しい庭園にはただ俺だけが居る
そして俺の心は清らかに青い空に向かっている

この庭園のひそやかさと、俺の心の安らかさが
あの高揚したギターの音をこの庭にこもらして
世にも美しい没落を廃墟からかもし出すのだ

影は光にもたれかかり、庭をまどろませ
下界と完全に遮断されて処女の如く
ひっそりとうつむいて、俺には悩ましげに見える

さて、もう立ち去らねばなるまい
絞首台のあの嫌らしい階段を上れば
俺は確かにこの庭を汚すことはあるまい

(1982.5.31)